

日本人成人における感覚処理感受性と年齢の関連

大規模横断調査による発達軌跡の検討

○上野雄己(日本学術振興会)・高橋亜希(東京福祉大学)・小塩真司(早稲田大学)

キーワード: 感覚処理感受性, Highly Sensitive Person, 年齢, 発達軌跡, 日本人成人

目的

生涯を通して経験するライフイベントはポジティブな側面だけでなく、ネガティブな側面も多い(Holmes & Rahe, 1967)。これらの出来事を介して精神病理学的問題に繋がる可能性は少なからずあり、近年では約 350 万人以上の日本人成人が不安障害やうつ病などの精神疾患を罹患していることが報告されている(厚生労働省, 2015)。しかし、同じ出来事を経験しているにも関わらず、先述した問題へと派生しない人たちが存在する。こうした両者を理解するうえで、感覚処理感受性(sensory-processing sensitivity: 以下, SPS)の概念が注目されている。SPSとは、脳内で感覚情報を処理する過程における生得的な個人差であり、SPSが高い人たちは Highly Sensitive Person(以下, HSP)と呼ばれ、全人口の 15%程度いる(Aron & Aron, 1997)。HSPの人たちの特徴として、微細な刺激に対して敏感で刺激過剰になりやすく、抑うつや不安傾向が高い(e.g., Aron, 2010; Aron & Aron, 1997; 高橋, 2016)。一方で、SPSは生存戦略として重要であり(Kagan, 1994)、近年ではポジティブな側面の研究も進められている(Pluess & Belsky, 2013)。しかし、国際的に幅広い年代層を対象とした研究はなく、SPSが年齢と伴にどのような発達軌跡を描けるか検討されていないのが実情である。

そこで、本研究では 20 代から 60 代の日本人成人を対象とし、SPSと年齢の関連を明らかにすることを目的とする。発達の変化の検討には長期の縦断調査が理想的ではあるが、パーソナリティ特性においては、横断調査であったとしても大規模なサンプルサイズによる年齢間の比較を行うことで、ある程度の発達の変化の有効な検討が可能とされる(川本・小塩・阿部・坪田・平島・伊藤・谷, 2015)。また、パーソナリティ特性の年齢的变化を検討した研究(e.g., 川本ほか, 2015)を参考に、SPSに対する年齢の効果を 1 次(線形的効果)と 2 次(曲線的効果)の観点から分析を施し、性別と年齢の交互作用も考慮した重回帰モデルにて実施する。

方法

調査時期・対象者 調査はインターネット調査会社(株式会社クロス・マーケティング)に委託し、調査ソフトウェアの Qualtrics を用いたオンライン上で実施した。調査時期は 2017 年 1 月であり、回答に不備や欠損、重複の回答、IMC(instructional manipulation check: 三浦・小林, 2016; Oppenheimer, Meyvis, & Davidenko, 2009)を用いて違反と判断された回答者を除外した、47 都道府県および 20 歳から 69 歳の日本人成人 1,983 名(男性 1,078 名, 女性 905 名, 平均年齢 48.85 歳, $SD = 10.87$)を分析対象とした。

調査方法・内容 本研究では、Web 調査による、(1) フェイスシート(性別・年齢)、(2) Highly Sensitive Person Scale 日

本版(高橋, 2016: 以下, HSPS-J19)、に対する回答を求めた。調査は株式会社クロス・マーケティングの定める個人情報の取り扱い規程に則り匿名で行われ、研究の趣旨や守秘義務について調査票の冒頭に明記し、対象者に同意を得た上で回答を依頼した。なお、調査は倫理委員会の承認を得て実施された。また、発表に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業などはないことをここに記す。

結果と考察

分析は HAD16.012(清水, 2016)を使用して行われた。本研究では HSPS-J19 の下位尺度及び総得点を用い、内的整合性を示す Cronbach's α は .62— .85 であった。SPS と年齢の関係を検討するにあたり、Pearson の積率相関係数を算出したところ、-.13— .14 であり、年齢との間で有意な相関関係が示された($p < .001$)。次に、性別(男性 = 0, 女性 = 1)、年齢を独立変数、SPS を従属変数とした階層的重回帰分析を行った。第 1 ステップに性別、第 2 ステップに年齢と年齢の 2 乗項、第 3 ステップに性別と年齢、性別と年齢の 2 乗項の交互作用項を投入した。分析の結果、HSPS-J19 の全ての下位尺度及び総得点において Step 2 の ΔR^2 が有意であったが、交互作用を投入した Step 3 の ΔR^2 では有意な値が示されなかった。また、HSPS-J19 の下位尺度である低感覚閾、易興奮性及び総得点では年齢からの負の線形的効果が見られ、一方で美的感受性においては年齢からの正の線形的効果が確認された。

以上のことから、低感覚閾、易興奮性及び総得点は年齢と伴に直線的に下降傾向、美的感受性では上昇傾向を示すことが明らかとなった。Caspi, Roberts, & Shiner (2005) は、成人期以降は社会的におおよそ望ましいとされる方向にパーソナリティ特性が発達していくという成熟の原則(mutuality principle)を提唱している。SPS と類似した概念である神経症傾向においても年齢と伴に直線的に下降傾向を示すことが報告されており(川本ほか, 2015)、これらの先行研究と一致した結果となった。しかしながら、本研究では横断データを用いた擬似的な発達軌跡を検討したにしか過ぎず、今後はコホート研究によって追試していくことが望まれる。

付記

本研究で用いたデータセットは、小塩真司(早稲田大学)・三浦麻子(関西学院大学)・上野雄己(日本学術振興会・早稲田大学)・川本哲也(日本学術振興会・慶應義塾大学)による共同調査プロジェクト「Data-Sharing for Psychology in Japan (DSPJ)」によって収集されたものである。本調査は、JSPS 科研費 25380893、関西学院大学大学共同研究(公募研究 B)、JSPS 科研費 16J00972、JSPS 科研費 16J07940 の助成を受け実施された。

(UENO Yuki, TAKAHASHI Aki, OSHIO Atsushi)